

r h e t o r i c l i t e r a c y 表現技術と読み書き能力について

—物語社会学のための予備的検討—

北村 日出夫

KITAMURA Hideo

1. 問題の発端

1.1 表現技術としてのレトリック

コミュニケーションは「行為」であり、記号+メディアはそれを媒介する「物質」である。この「行為」と「物質」を繋ぐものとしてレトリックを措定することができる。

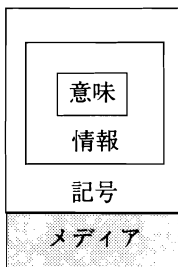
コミュニケーションは他者に働き掛ける行為であり、そのために記号・メディアを利用する。しかし、ただ単に物質としての記号+メディアを利用するだけではない。ある目的をもったコミュニケーションという行為を達成するために、記号+メディアをどう組み立てるかという合目的選択が必須である。記号・メディアの選択を支えるのが「表現技術」であり、この技術をここでは「レトリック」と捉える。いかに記号を組み立て、それをいかなるメディアに乗せる

かということ、それが表現技術であり、レトリックである。——参考のために「[意味・情報・記号]+メディア」の関係図を【図1】に示す(北村 1985:32に「メディア」を加えたもの)——。

朝、友人に会って挨拶しようとするとき「おはよう」というか「やー」というか、あるいは、軽く会釈するか、等々——これらの行為のどれを選択するかは挨拶というコミュニケーション行為を達成するための記号+メディアの合目的選択に関わる表現技術の問題である。ある感情を表現しようとするときでも、たとえば、俳句をよむか、絵を描くか、音楽を演奏するか、身体的な表現をするか、記号+メディアに関わるさまざまな選択肢があり、それぞれの中でも、そこで適切と判断した表現技術を駆使している。

コミュニケーションのみならず、一般に、人

【図1】[意味・情報・記号]+メディア関係図



- ◇記号=情報を外化(具体化)する契機となるもの
ex. 「言語」「音符」「絵画」等
- ◇メディア=記号を知覚可能にするもの
- ◇「[意味・情報・記号]+メディア」総体の具体=表現体
ex.1 ある人が今話していることば
ex.2 美術館で目の前にしているピカソの絵
ex.3 安部公房の刊行中の著作集の一小説

間が何かを表現しようとするとき、その表現には必ず何らかの技術を必要とする。

こうした表現行為——行為としては「一連の」という修飾をつけた方が適切かもしれない——に必要な技術がレトリックである。ということは、レトリックは、通常いわれているような「ためにする」何か特別の表現技法ではなく、表現行為に必ず伴うものである。表現技術、すなわち、レトリックがなければ表現行為は成立しない。ここではレトリックをこのように理解する。

1.2 表現体の構造とレトリック

上記のレトリックの考え方を別の面から説明するために「構造」ということを考えてみる。

【図1】内の説明で示したように、意味・情報を入れ子状に包み込んだ記号+メディアの総体的具体を「表現体」と呼ぶことにする。「表現体」は自ら構造をもつ

と考えられる。文章・絵画・音楽・身体表現等々の表現体は、それぞれ、語・文、線・色(色調)、小節・楽章、身体諸部分、等々、いずれもいくつかの要素もち、さらに、それに関連・結合するメディアの要素をも伴っている。それらの要素はある有機的関連付けの中でまとめ、すなわち、システム的な統合体として現前する。このシステム的な統合体を可能にする要素関連のありようを「構造」という。

表現体を構造化するのがレトリックである。表現体が構造をもつのは、表現体が人間の表現行為の結果だからであり、その表現行為にはレトリックという操作、あるいは、レトリックの

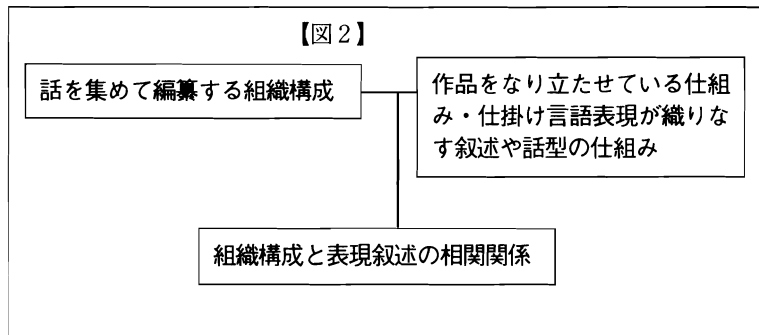
存在を必ず伴っているからである。したがって、表現体における構造は、レトリックの具現型、あるいは、レトリックの結果と考えてよい。

小峯和明の著作を借りて説明の補足をしよう。

小峯和明は『今昔物語集』の「形成」と「構造」に関連して次のように述べている。

—「構造」も一般化した術語であるが、必ずしも表層と深層に相わたる構造主義的な用法のみにはよらない。そうした用法をとりこみつつも、より広いゆるやかな、文字通り作品をなり立たせている仕組みや仕掛けの意味で用いたいと思う。それは単に個々の話を集めて編纂する組織構成の面ばかりでなく、言語表現が織りなす叙述や話型の仕組みをも対象とし、組織構成と表現叙述との相関関係の究明を意味する。(小峯 1993: 2)

この叙述を私なりに図式化してまとめると【図2】のようになる。



上記の引用文の「構造」をもたらしめているのがレトリックであり、したがって、「構造」を「レトリック」に置き換えても文意は通る。つまり、「話を集めて編纂する組織構成」も「作品をなり立たせている仕組み・仕掛け」も「言語表現が織りなす叙述や話型の仕組み」も、いずれもレトリックと解し得る。さらに、これら「組織構成」と「表現叙述」の相関関係もまたレトリックの範疇である。

物語の構造はレトリックによって形成される。物語に構造を与えるのがレトリックである。

【図2】は、これ自身が（物語を）レトリックの面から論じるときの関連図式と見做すことができる。物語を論じるとき、物語に「構造」をもたらすものとして、レトリックが必須の分析概念であることが明らかである。

ここでも、レトリックが決して特殊な表現技法ではないことが理解されるだろう。

1.3 旧レトリックということ

ただ、前述のように、従来「レトリック」といえば「ためにする」表現技法と考えられてきた。「レトリック過剰だ」「レトリックに走り過ぎる」といった「過剰」概念を伴った《文章を飾り・彩る技法＝文飾技法》か、「それは単なるレトリックだ」という「内容・中身」がない《虚飾された文体》などとして理解されてきた。

古代から近代にいたるヨーロッパで継承された技術体系としてのレトリックを「旧レトリック」として最初に問題にしたのは、ロラン・バルトであった（Roland Barthes 1970=1979）。バルトのこの著作を前提にしながら、佐藤信夫は、岩波書店の月刊誌「思想」の「特集・レトリック」（No.682=1981年8月）で「消滅したレトリックの意味」と題する巻頭論文を書いている。

そこで佐藤は、論文の冒頭で「かつて、レトリックと呼ばれるひとつの技術体系があった。」と述べる（傍点＝北村）。この一文は、論文の題名そのものの言い換えでもある。「十九世紀の末、それまで人文教養における仕上げの課程としてレトリックが教育制度のなかに占めていた重要な地位が正式に廃止されるにおよんで、技術学としてのそれは急速に消滅することとなった。」「ヨーロッパでレトリックは、あきらかに制度以

前から需要を失いつつあったのだ。それはおおむね十九世紀初頭からのことだったといえるだろう。」「ところが――、技術体系としてのそれが消滅した後も、《レトリック》という名称は古語とならず、かなり流通性の高い現代語として生き残ったのである。」（傍点＝佐藤）そして「少なくとも一九八〇年代までは――消滅後ほぼ百年近く――レトリックはほとんどのばあい、好ましからざるものごとを呼び捨てる名称であった。」

では日本においてはどうか。佐藤は「たしかに明治時代、消滅寸前の西洋流レトリック体系が《ある程度》紹介され、導入され、応用されはしたが――（中略）――けれども、そういうレトリックが教養の制度のなかに重要な位置を占めるといふ結果には決してならなかった。」という。

こうしたことを概観した後で、佐藤は「多くのばあい侮蔑的な、そしてときには肯定的な、レトリックという語の用法――を、大きく分けて三つ、あるいは四つの傾向としてみるができる。」とし、それらを《レトリックA》《レトリックB》《レトリックC》と名づけ次のように説明している。

レトリックA――技術体系としての、かつて重んぜられた制度的な学科としての、そしてこんにちではたいてい愚かしい規則集として想起されるレトリック。

レトリックB――説得効果としての、言語的戦術としての、そしてしばしば嫌悪すべき欺瞞の効果としてのレトリック。

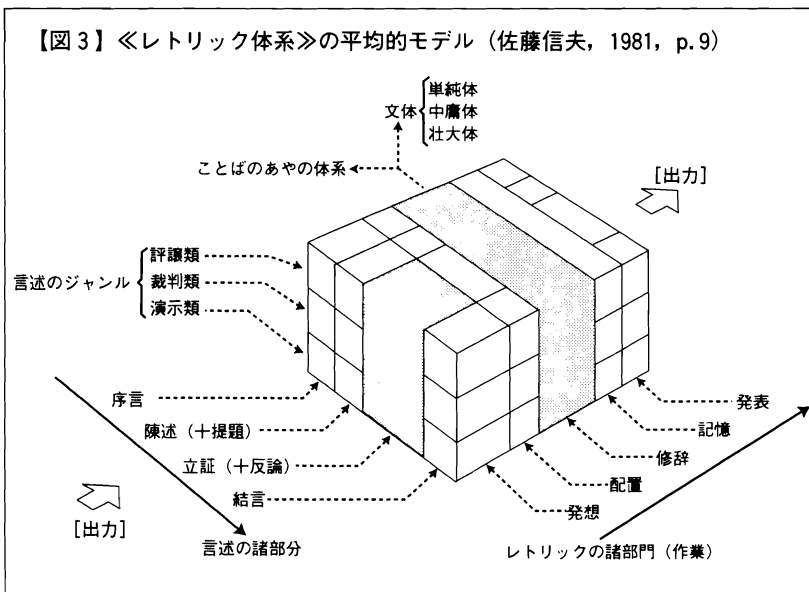
レトリックC――修辞表現としての、目立つことばづかいとしての、そ

してときには浮薄な装飾としてのレトリック。

さらに、「伝統的レトリックの体系とは別に、いわばレトリック的問題を現代的視点から理論的に分析しようという多様なこころみがあるわけで、それらの【新しいレトリック】を一括して《レトリックD》と名づけることもできそうであるが、それは当面の私たちの課題ではない。」と、この論文では排除している。

そして、佐藤は「《伝統的レトリックの体系》の平均的モデルの試作」として【図3】を提示する。

【図3】



この図に従いながら、佐藤は先の「レトリックの三つの用法 (A・B・C)」と、それぞれに対する「反レトリック観」について述べ、哲学的思考の中で「反レトリック観」が「ある面で正確に表現されている」ことを指摘しながらも、近代哲学の行き詰りをほのめかしつつ、最後に、レトリックに対するある種の期待を暗示している。

佐藤もいう日本語で「修辭^{Elocutio}」といわれたこととレトリックの違いをも考慮しながら、私は、

19世紀に制度的に排除されたヨーロッパの伝統的レトリックとは異なる視点からレトリック概念を捉え直し、それを、言語に限らず、すべての人間の表現行為を考えるひとつの手掛かりにし、その先に「物語社会学」なるものを構築することを目的としている。本論文は、その《契機^{きっかけ}》を論じることを目的としている。

2. 語用論とレトリック

2.1 チャールス・モリスの記号論3分野

モリスは記号論の研究分野として

- ①意味論 semantics
- ②語用論 pragmatics
- ③構文論 syntactics

の3分野を設定する (Charles Morris 1938=1988. および、Charles Morris 1946=1960)。

モリスによれば、記号とその記号を適用できる対象との間の諸関係の研究が「意味論」、記号と解釈者 (= 記号の使用者) との間関係の研究が「語用論」、そして、記号どうし

(= 記号と他の記号と) の形式的な関係の研究が「構文論」である (Charles Morris 1938=1988: 12-13)。

さらに、『記号と言語と行動』では、記号論上の捉え方の修正の必要性に触れながら、3分野それぞれの規定の仕方について若干の修正をしている。その中で「語用論」を「記号論の一部であって、記号の起こる行動の枠内で記号の起源・使用・効果についての研究」と規定してい

る (Charles Morris 1946=1960:252) ——この翻訳書では「pragmatics」を「使用論」と訳しているが、その後の一般的な翻訳語に従って、本論文では「語用論」を採用する——。

意味論・構文論については広く論じられてきているが、語用論を提唱したのはモリスだという評価がある (瀬在良男 1970:186-187)。ただ、『記号と言語と行動』で、モリスは、記号論の文献では「語用論」を含めてこの3分野の用語法が広く行なわれていると述べている (Charles Morris 1946=1960:250)。私は、このようなモリス自身の言及があるにも拘らず、敢えて瀬在の評価を採用することにしたい。それは、G.N.リーチが「語用論の歴史的概観」で、「語用論」の使用に関して時間的にはモリスをもっとも古い研究者として取り扱っているからである (G. N. Leech 1983=1987)。

いずれにしても、語用論は、構文論・意味論より研究されることが比較的遅かったし、研究量もはるかに少ない。たとえば、日本において「語用論」という用語がこの領域の刊行物に最初に登場したのは、おそらく、大修館書店の月刊誌「言語」の1980年12月号 (Vol. 9 No. 12) の「特集・語用論とはなにか」ではなからうか。

2.2 語用論とメディア

語用論とレトリックの関係を議論する前に、メディアの問題に触れておく。

先に引用したように、モリスによれば語用論は「記号論の一部であって、記号の起こる行動の枠内で記号の起源・使用・効果についての研究」である。私は、語用論を「人間の表現行為の具体的な場面を《記号+メディア》の観点から取り扱うもの」と考える。モリスが「記号の起源・使用・効果についての研究」(傍点=北村)といっているのに、なぜメディアを加えるのか。

「1.1」で指摘したように、私は、表現行為を具体化するものとして《記号+メディア》を考えている。語用論が具体的な場面での人間の表現行為を問題にする以上、メディアの問題を抜きに論じることは出来ない。何を如何に表現するかという場合、メディアの選択が不可避である。語用論に限らず、一般的に欧米の記号論 (=記号学) ではメディアの問題に触れることがほとんどない。このことは欧米の言語学がメディアの問題を排除していることから頷けるが、基本的には記号を論じるときメディアを無視しえないというのが私の立場である。簡単にいえば、記号はメディアなしに私たちの前に現れないからである。メディアなしに記号は人々に知覚されないからである。構文論・意味論とは異なって語用論は具体的な表現行為を扱うから当然メディアが視野の中に入る。

小学生が遠足から帰ってきて、その模様を母親に話しているという発話行為 (一種の表現行為) を想定してみよう。おそらく小学生は手振り・身振りを含めて興奮気味に遠足での出来事を話しているだろう。手振り・身振りはほとんど無意識に行なわれているが、この小学生にとっては、遠足を語るための重要な役割を果たしているメディアになっているに違いない。興奮気味の発話 (言説) も、この小学生にとって言語記号を強化するさまざまな記号 (=メディア) を伴っている。この小学生が母親に語る事象を小学生の母親宛の「表現行為」として捉えるとき、いまま指摘したように、言語記号のみに限定すれば、表現行為の具体的研究分野としての「語用論」にならない。この小学生の母親に向かった発話行為は、《記号+メディア》を含む行為総体として把握しなければならない。ややトートロジー気味の言い方になるが、発話行為 (一般には表現行為) を《記号+メディア》を含む行為総体

として把握することが「語用論」なのである。

このことは言語による発話行為に限らない。何事かを表現したい（伝達したい）とき、言語を選ぶか、映像を選ぶか、絵画を選ぶか、写真を選ぶか、音楽を選ぶか、等々は表現行為におけるメディアの選択の問題であり（このことは1.1ですでのべた）、それ自身が「語用論」の領域そのものに関わってくる。そして、メディアの選択を準備範囲とする「語用論」は、当然、レトリックにつながってくる。

2.3 語用論とレトリック

「1.」の「問題の発端」でものべたように、メディアの選択を含めて表現体を構造化するのがレトリックであるから、ここでいう「語用論」ではレトリックに関する考察が不可避である。逆にいえば、レトリックを論じることは、語用論そのものなのだ。

たとえば、牧野賢治は「レトリックによる表現技術は、内容をかたちづくる本質的な側面である」とのべ、また「レトリックは私的な思想をパブリックにする行為である」とものべている（牧野賢治 1996：16）。ここでは、表現主体が記号を如何に効果的に用い、内容を現出するかという語用論の領域を「レトリック」と捉えられていることがわかる。

レトリックによって、表現体が具体的な産物として知覚可能になり、それゆえに語用論との関連が出てくる。モリスは「修辞学とか文法論とかの語を記号論に導入しないほうが望ましい」（Charles Morris 1946=1960：214）とのべているが、ここでの「修辞学=レトリック」は、論理学・修辞学・文法論というアリストテレス以来の伝統的な3分法に従ったもので、19世紀に「消滅したレトリック」のことで、いま私が捉えようとしているレトリックとは異なるもの

だと理解するのが適切であろう。

リーチは、モリスとは反対に、語用論の中にレトリック（翻訳では「修辞学」）を積極的に採用しようとしている。彼は、主として日常的な会話のコンテキストの中に語用論を位置づける。「このようなコンテキストの中で『修辞学』という用語を用いる意味は何かと言えば、それがゴール指向的な発話の場面——つまり、話し手が聞き手の心の中にある特定の効果を生じさせるという目的で言語を使用するという場面——に焦点を置いているからである」（G.N.Leech 1983=1987：21）とのべている。また、リーチはこの修辞学の捉え方にに基づきながら「対人関係の修辞」と「テキスト形成的修辞」の二つの修辞学を提起している（G.N.Leech 1983=1987：22）。

私は、こうした語用論に関するリーチの考え方にメディアを包摂させて、レトリックは語用論のレベルでの表現技術そのものであると考える。

3. 読み書き能力

3.1 「判り易さ」とメディア状況

テレビは20世紀最大のメディアであることに、ほとんどの人は異論はないだろう。このテレビをはじめとして20世紀に制度化されたコミュニケーション・メディアは、19世紀にほぼ原型を現している。そして、19世紀末まで支配的であった活字（文字）という閉鎖的なモードを基本としたメディア（印刷メディア）に対して、20世紀に次々制度化されたコミュニケーション・メディアは、音声（=電話・ラジオ）と映像（=映画・テレビ）という人間にとってもっとも近づきやすいモードにもとづいている。活字を閉鎖的といったのに対していえば、音声・映像

(絵・写真)は開放的である。音声は人間が言語を習得する過程の中でもっとも基本的なモードであり、映像(絵・写真)の受容は幼児の発達過程で生理的に習得されていく。

生まれて間もなくのときから、人間は、周囲から音声を聞き、それを真似ながら自ら音声を発していくことを覚える。音声はその意味でもっとも「原始的・原初的」なモードである。その音声を、肉声として聞こえる範囲を越えて伝えようとする営為が電話や無線通信を生み出し、さらにラジオを発達させた。後に録音という技術に支えられて発展したけれど、電話や無線通信・ラジオは、言語や音楽といった人類の初期的文化を、ただ遠距離に伝えるというメディアに過ぎない。少なくとも、音声は、人間生理に属し、後天的に習得するための努力を必要とする文字とは根本的に異なる。ラジオの初期には、この誰でも受け入れられる音声メディア特性が強調された。そこでは、大衆(民衆)が文字によって差別されてきた状況を打破するメディアとしての期待がのべられている。

映像(絵・写真)に関しても、音声と類似のことがいえる。座ることができるようになった子どもに筆記用具を持たせると、教えなくても、何かを描こうとする。自然と声を出すことを真似るのと同様に、何かを描くというのは人間の自然な能力のようだ。何を描こうとしているのかは定かではないが、見えるものと、筆記用具の痕跡とは子どもの頭の中ではそれなりに類同しているのかもしれない。文字は読めなくても、絵本や写真を見ることは、一定の発達段階に達すれば何の支障もない。

映画は「音なし」から始まったが、現実に近い動く絵・写真をメディア化した。そのうちに、これに「音」を加わえて現実感が倍加する。作る側は別として——作る側はレトリック

の問題である。両者を合わせては「4.」で論じる予定である——、映画を見るのにたいした努力を必要としない。したがって、映画はその初期から大衆娯楽として広く人々に享受された。映画ははじめから大衆の娯楽メディアであった。

テレビは、「ラジオ」と「映画」をプラスし、かつ、映画館に行くという「外出行為」をマイナスした形で、家庭という日常空間に入り込んだメディアである。もはや「テレビの見方」など問題にしなくても、大衆娯楽の王者の貫禄をはじめからもっていた。20世紀最大のメディアというのはそういうことを含んでいる。いままでのメディアの中でもっとも近づき易いメディアであることは疑いえない。

そのテレビがほぼ100%家庭に浸透した段階で、テレビの表現に関して「判り易さ」が問題になってきた。このことについて前に論じたことがある(北村 1997)ので詳細はそちらにゆずるが、マス・メディア(=テレビ)の送り手側から「判り易さ」とは何かという問いが現れたことに注目する必要がある。

3.2 リテラシーのイデオロギー性

「判り易さ」とメディア・リテラシーは、テレビ・メディアの全盛期に、いわば向き合う形の「対称形」として論じられはじめた。——この点に関しても、前掲論文(北村 1997)で取り上げているので、ここではその補足程度にとどめておく。

リテラシーのイデオロギー性は、文字そのものの産物である。前述のように、文字が読み書きできるためには相当の努力と、社会的条件を必要とする。文字が読み書きできるものとできないものを作り出すのは、国家、あるいはそれに類するシステムが政治的に管理する「読み書きソロバン」を基本的な教育内容とする「教

育制度」である。この「教育制度」から、文字を読み書きができるものができないものを差別する社会構造が生まれ、文字そのものに権威(一種の物神性)を与え、文字を読み書きできるものが社会的な優位に立つ文化を形成する。逆に、文字を読み書きできなければ社会的に劣位な存在に追いやられる。ここに、「文字が読み書きできる能力」としての「リテラシー」という概念が登場する。政治権力がその網目に組み込み・物神化する作用を「イデオロギー」というなら、リテラシー概念は、はじめからイデオロギー的性格を帯びている。

3.3 メディア・リテラシーの使われ方

テレビ・メディアを通じた映像が何を語っているかを読み解く能力は、従来の文字に関する「リテラシー」とは異なる能力だとする捉え方から「映像リテラシー」という言葉が使われだした。テレビが社会の支配的なメディアになる1970年代初頭の頃である。その背景には、マンガ世代の形成がある。およそ1960年代以降の劇画等のマンガがもつ独特のモードが、最初のマンガ世代を形成し、彼ら・彼女らは、マンガ世代以前にはできないスピードで漫画を読みこなす能力をもつようになった。この能力に対して、文字に関するリテラシー概念からのアナロジーで、映像リテラシーという言葉が使われ、それが、テレビへと移行するようになったと考えられる。

さらに、テレビを最後とする数々のマス・メディアの複合時代の中で、マス・メディアを教育にどのように取り込むか——道具として・対象として——という課題設定が行なわれ、リテラシー概念の対象をマス・メディア全体に及ぼす必要が生じ、「メディア・リテラシー」という用語が使われるようになった。

したがって、リテラシー概念が、その発生からずっともっていたイデオロギー性はメディア・リテラシーという用語になってからは消滅したはずである。その必要性の是非は厳しく論じられなければならないが、本来的に、「メディア・リテラシー」はイデオロギー性をもっていないと考えるのが普通である。

ただ、リテラシー概念が、何らかの「能力」と結びついている以上、その「能力」をどう価値判断するかというときにイデオロギー性が入り込む余地はある。また、教育制度の中にメディア・リテラシーを組み込めば、能力評価と関連して、制度的にイデオロギー性を帯びざるを得ない。さらに、啓蒙主義的思想からみると、メディア・リテラシーは「誰か」によって大衆(=民衆)に付与される能力であるという優劣関係の中に位置づけられ、イデオロギー性をもってくる。

以下本稿では、メディア・リテラシーという用語は用いない。レトリックの《対称》概念として、また、脱イデオロギー化されたメディア・リテラシーを経由した後のものとして「リテラシー」を用いる。ここでのリテラシーは、《送り手—受け手》の相互行為図式に従えば、受け手の理解行為の中で受け手が主体的に捉える概念である。

4. レトリックとリテラシー

4.1 テキスト論とリテラシー

マス・コミュニケーション研究の流れを大ざっぱにみると、過去50~60年間は、受け手がメッセージを如何に受け取るかということに関心が寄せられてきた。もっとも、送り内容そのものに関して研究が行なわれなかったわけではない。受け手行動への作用因として送り内容の研究は

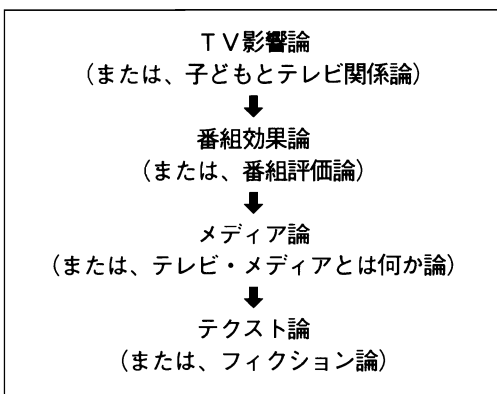
継続して行なわれてきている。しかし、基本的には送り内容を受け手の立場から論じてきた。

一方、コミュニケーションに対する記号学的なアプローチは、送り手から受け手への「伝達」(＝狭義のコミュニケーション)に関わる記号解読の領域と、受け手の解釈行為との関連で送り内容の意味作用に焦点を合わせる領域と、二つの領域が併存してきた。そして、記号学としての重点は送り内容の「意味作用」に置かれてきた。

文学理論の世界では、「テキスト」といわれる表現体そのものを見据え、「テキスト」を独立した存在物として批評・研究の対象にする方法論が今世紀後半になって現れる。いわゆる「テキスト論」といわれるものである。

このように、人間関係の中に措定される表現活動や表現体をめぐる今世紀後半の理論化の動きは、広い意味で「テキスト論」の方向に進んでいる。如何に効果的にメッセージを伝えるか、メッセージを効果的に伝えるためにはどうすればよいかという問題意識より、メッセージ自体を(ある意味で)送り手から離れ・独立した「テキスト」として捉える方法論が優位を占めている。

たとえば、テレビ研究の「焦点」は、



と単純化してみることができる。受け手研究の

大きな流れの中で、送り内容そのものを《テキスト》として捉える方向に向かってきている。テレビ・メディアの発達過程と受け入れ方との相互関連の中での焦点シフトである。テキスト論——受け手の主体的な解釈の対象としてテレビ番組(場合によっては、テレビ全体)を措定するという——は、テレビ研究においても一定の役割と機能をもつ研究分野となっており、他メディアと同様の研究傾向とみることができる。

テキスト論をこのように捉えた場合、テキストの解釈者としての受け手のリテラシーが問題になる。テキスト論では、目の前に置かれた《テキスト》を主体的に解釈するその人間のリテラシーが関係してくる。テキスト論には、そのテキストの読み解き方(＝解釈のし方)を問うことが含まれ、その読み解き方こそリテラシーそのものである。議論の焦点がテキスト論に移行する過程で、リテラシーが従来のものとは姿を変えて登場してきたのにはこうした背景があると思われる。

なお、リテラシーを「読み書き能力」とした場合、ここでの議論で、リテラシーには「書く能力」が必ずしも含まれていない。これは、あえて、レトリックとの《対称》概念として扱うことに主眼を置いているためである。

4.2 テキスト論とレトリック論

前述のように、テキスト論は、どちらかといえば「送り手」を排除する。送り手をカッコの中に入れることがテキスト論だともいえる。しかし、テキストが何を表現目的とし、何故にこのメディアを選択し、如何に表現体としてこのような形をとるに至ったか——つまりレトリックに関して——は、テキスト論における一連の「解釈行為」では無視することはできない問題点

だ。禁欲的なテキスト論では、送り手を嚴重なカッコに入れようとする。しかし、人間の表現体を読み解こうとする行為では、いまもいったように、表現行為におけるレトリックの問題を避けることはできない。送り手をいくらカッコの中に入れても、レトリックは姿を消さない。

《送り手—受け手》の相互作用図式の中で、レトリックとリテラシーを分離させることは不可能である。不可能のはずなのに、いままではそこを無視して、あえて別の問題と見做されてきた。主として「送り手と送り内容」を論じる場合も、主として「受け手とその解釈行為」を論じる場合も、相互に関連するときには、レトリックにもリテラシーにも目配りする必要がある。

「2.」で取り上げたG.N. リーチは、レトリックに関して「二つの修辞学」を提示している(G.N. Leech 1983=1987:22)。語用論に関わるものとしてのレトリック(=翻訳文献では「修辞学」)は、話し手・聞き手双方に特定の効果を生じさせることを目指していると考えるリーチにとっては当然のことかもしれないが、彼が提示する「二つの修辞学」は、「対人関係の修辞」と「テキスト形成的修辞」の二つから成る。

「対人関係の修辞」は「協調の原理」「丁寧さの原理」「アイロニーの原理」などから構成される。これらは、表現行為が向かう他者(相手)への《態度》の問題であり、ある意味で表現のコンテキスト作りに関わるレトリックでもある。このことは従来のコミュニケーション理論や《送り手—受け手》の相互作用図式の中で取り上げられている主題であり、リーチが、語用論の中でこれを指摘していることは当然のことである。

「テキスト形成的修辞」では、「処理可能性」

「明晰さ」「経済性」「表現性」の4つの「原理」を示している。ここでは、構文論・意味論を含む表現行為が行なわれる現実の場面に関わるレトリックを取り上げている。この裏側には、表現体を受け取る人間が想定されている。逆にいえば、テキストを解釈するときに、テキストの表現者が採用したレトリックに目を向ける必要性の指摘でもある。

テキスト論においても、リテラシーのみならず、表現主体のレトリックへも関心を示す必要はこのようなことから理解されるだろう。人間が表現するもの(=表現体)それ自身を対象にするにせよ、《送り手—受け手》の相互作用、すなわち、コミュニケーション一般を対象にするにせよ、それに関わる人間の誰かをカッコにくくって排除することは適切ではない。テキスト論はレトリック論を含んでいると考える。

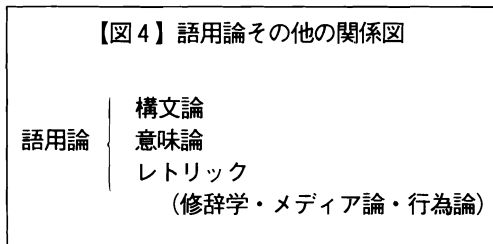
4.3 一応の整理——物語社会学の展開へ

人間が物語るとはどういうことか、人間の表現はすべて物語りではないか、マス・メディアが発するメッセージは、ニュースもドラマも、新聞記事も、すべて物語りではないか、また、物語るという行為はいかなる動機から生まれるのだろうか——、そのようなことを考える一方で、表現行為そのもの問題からレトリックやリテラシーについて考えることへと興味を広げてきた。語用論に関してもずっと以前から気になっていたことである。

もともとは、『今昔物語集』を現代に引き寄せて私なりに自由に解釈することから始まった。が、『今昔物語集』そのものにはなかなか手がつかないで、周辺部分ばかり逍遙している感じである。まだ思考の過程であるが、ここでレトリックとリテラシーについて私なりの理解と捉え方をのべてきた。これらと語用論を結びつけてこ

の論文段階での一応の結論を示しておきたい。

「2.1」でのべたように、語用論がモリスによって提起されて以来、それは構文論・意味論と並列して位置づけられている。ここにレトリックをどのように組み込むかというとき、いままでの議論をふまえて、私は次のような図式で考えてみたい。



まず、人間の言語活動、一般には表現活動(表現・解釈行為)を「語用論」のレベルで把握することを考える。「語用論」ではあるが、ここでいう「語」は言語に限らず記号一般を指すものとする。人間の表現行為は、すなわち具体的に記号を使う過程である。記号を使い、記号表現をし、記号を解説・解釈し、等々、表現行為・解釈行為すべてを包む行為を記号行為と名づけるなら、記号行為は語用論的レベルで先ず把握すべきである。これが上記の関係図の一つの意味である。

語用論の中で、構文論・意味論が考慮される。もちろん、構文論・意味論が独立して扱われる場合もあるが、語用論にはこれら二つを含む必要がある。何かを表現しようと記号使用する場面では、記号間の関係や、記号と対象との関係をも考慮しなければ、記号使用の具体は捉えられないからである。

レトリックは、前述したように、表現行為、記号使用の場面で、表現者が行なう一連の選択行為に関わる技術的・実的な事柄である。したがって、レトリックの問題は語用論に含まれ

る。さらに、本論文で用いる「レトリック」には、旧・新両修辞学とともに、メディア論が含まれる。表現行為におけるメディア選択もレトリックの一分野であるからである。さらに、ここでいうレトリックは、それ自身人間の表現行為そのものと関わりをもつ意味で、行為論も包摂する場合がある。行為論のすべてでないにしても、行為への考察なしにレトリック論は成立しないので、レトリックの中に行為論を位置づける。

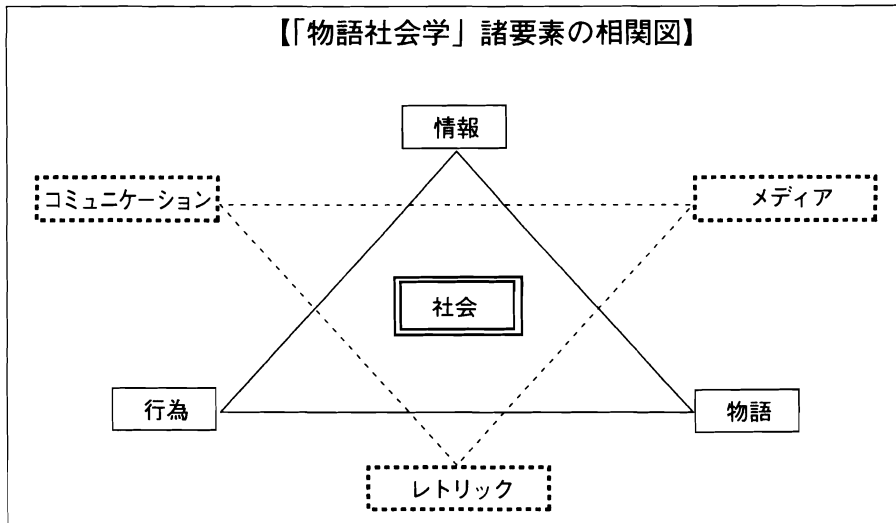
残るはリテラシーの位置づけである。語用論が「記号と使用者との関係」を問題にする以上、解釈者側の問題としてのリテラシーを何らかの形で語用論に関係させる必要があると思われる。しかし、これ以上の抽象論を避ける意味で、リテラシーに関しては、他のものの具体論とともに、物語論(物語社会学)を行なう場面で取り上げたい。

物語社会学は、人間の社会的な表現行為を「物語」という範疇と方法論で捉える。目標はこの物語社会学にある。前述したように、本論文はそのための予備的議論である。

~~~~~

【付記】①本論文の「原型」は「第10回 マスコミフォーラム」(1997年10月4日＝関西大学)で口頭発表した。その後、若干の修正と肉付けをしたのが本論文である。当日、質問をはじめ議論して頂いたマスコミフォーラムのメンバーに感謝する。

②この日の「マスコミフォーラム」で配布した「レジュメ」に下の図を掲載した。本論文では取り上げなかったが、物語社会学に通じる一つの通路として、「付録」の形で添付しておく。



### <引用文献>

(レトリックやリテラシーに関する参考文献は多岐にわたり、多くの先達に負うところ大である。ここでは、とりあえず、引用した文献に限る。)

北村日出夫 1985 『テレビ・メディアの記号学』有信堂高文社。

——— 1997 「『判り易さ』とメディア・リテラシー」, 日本記号学会編 (1997) 「感覚変容と記号論」(記号学研究17), 東海大学出版会。

小峯和明 1993 『今昔物語集の形成と構造 (補訂版)』笠間書院。

牧野賢治 1996 『理系のレトリック入門』化学同人。

佐藤信夫 1981 「消滅したレトリックの意味」, 『思想』1981年4月号, 岩波書店。

瀬在良男 1970 『記号論序説——その歴史と体系』駿河台出版社。

Charles Morris 1938 *Foundations of the Theory of Signs*, Univ. of Chicago Press.

Ch.W.モリス/内田種臣・小林昭世 訳, 1988 『記号理論の基礎』勁草書房。

——— 1946 *Signs, Language and Behavior*. New York, Prentice-Hall, INC.

C.モリス/寮金吉 訳, 1960 『記号と言語と行動』三省堂。

Roland Barthes, 1970 *L'Ancienne Rhétorique*. (Communications N 16) .

ロラン・バルト/沢崎浩平 訳, 1979 『旧修辞学』みすず書房。

Geoffrey N. Leech, 1983 *Principles of Pragmatics*. Longman Group Limited, London.

ジェフリー・N・リーチ/池上嘉彦・河上誓作 訳, 1987 『語用論』紀伊国屋書店。

#### [雑誌]

「言語」1980年12月号——特集「語用論とはなにか」, 大修館書店。

「思想」1981年4月号——特集「レトリック」, 岩波書店。